三重県護国神社奉賛会報

第七十四号

明治天皇御製（明治四十年）

たたかひの　ありし昔の　よがたりに
たふれし人を　まづおもふかな

春季慰霊大祭

四月二十一日・二十二日の両日にわたり春季慰霊大祭が斎行された。

二十一日は晴天に恵まれたが、二十二日は残念ながら大雨となった。しかし、多くの御遺族崇敬者に御参列いただいた。

乙部会長には、両日とも御参列をいただき、奉賛の誠を捧げられた。

二十二日には、大雨の中、乙部会長のご発声により万歳三唱が声高らかに奉唱された。

万灯みたま祭

（七月二十三日～二十五日）

かつての国難に際し、家族と郷土と国家を護らんとし、御盾となり命を捧げ尽くされた護国の御英霊に万の灯（よろずのみあかり）をもってお慰めし、平和を感謝し幸福を祈念しましょう。

当奉賛会でも拝殿前に大型提灯二灯を毎年献灯し協賛しておりますが、会員各位よりの尚一層の御献灯を宜しくお願い申し上げます。

◇一般献灯　一灯　二千円

鳥居脇に献灯します

◇特別献灯　一灯　五千円

外拝殿に献灯します

会費納入のお願い

『平成二十一年度』は来る八月三十一日をもって終了しますので、本年度会費未納の方は早めに納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費　正会員　二千円
特別会員　一万円

―― 英霊の言乃葉 ――

昭和十九年一月十七日付
母堂伊藤チセ宛の葉書

陸軍中尉　伊藤　一男　命

東京都出身
法政大学
陸軍特別操縦見習士官一期
大正十二年九月十二日生
昭和二十年七月十一日歿
満二十二歳

前略、暫く御無沙汰致しました。其の后皆々様にはお変りありませんか。一男も至極頑健にて、日夜軍務に精励致して居ります故、御安心下さい。単独飛行も許され、意気軒昂益々技術の練磨に精進致して居ります。然し吾々の真価を決定するは戦場の空に在り。悔なき最善を尽すこの信念の下に只管頑張り抜く覚悟であります。寒気益々相加はります故、とし子にも身体に留意され、決戦下の婦女として恥しきなき様すごされます様お伝へ下さい。先づは近況まで。戦友梶野が宜しくとの事です。父にも宜しく。

【解説】

伊藤一男中尉は昭和二十年七月十一日、「陸軍飛行第五五戦隊」隊員として、「三式戦闘機」に搭乗、万世飛行場より移動中、熊本県二見村上空にてグラマンと交戦、戦死。

法政大学在学中、ラグビー部の主将を務めていた伊藤中尉は抜群の運動神経で、陸軍入隊後はB29邀撃戦で数々の戦果を上げ、不時着すること数度、しかも身には微傷だに負わず、学鷲の間で「不時着の名人」の異名をほしいままにしたという。

年時不詳であるが、御遺族の保管する新聞には、戦闘機を背に立つ伊藤中尉の写真が大きく掲げられ、見出しに「学鷲の殊勲・B二十九を屠る―岡崎上空で伊藤少尉が―」と大書された記事が載っている。そこには、〈九日のB二十九東海地区来襲に〇〇基地では一機を撃墜し二機を撃破した。撃墜の殊勲者は法政大学出身の学鷲伊藤一男少尉で清水、北西両少尉がそれぞれ一機を撃破してゐる（以下略）〉と、その戦功を褒め称える文章が記されている。

また、伊藤中尉は無口であったが、後輩思いの優しい方であったため多くの部下から慕われた。令妹福地とし子さんは、終戦五十年目の十月二日、愛知県豊山村の第五五戦隊慰霊碑の前で執り行われた同隊慰霊祭に招かれ参列、多くの部下・戦友の方々から「伊藤中尉殿の妹君」と呼ばれ、大層親切にされたという。

また部下の中には、中尉の遺徳を慕い、しばしばとし子さん宛に書簡を寄せてくる。それほど部下に慕われ、また操縦技術抜群の伊藤中尉であったが、昭和二十年四月二十二日よりの天号航空作戦第七次総攻撃に愛機を翔って出撃した折には、ゆくりなくも、エンジン故障のため南西諸島のある島に不時着負傷してしまった。幸い島民の温かい看護を受け、五月中に原隊に帰還することが出来たが、当時の模様を伊藤中尉は、〈特攻隊出撃、先制制空の命を受けて僚機と共に出発したのは午前〇時だが、無念にも飛翔中エンジンがハタと止まつた。もう駄目だと覚悟を決めたが、最後まで頑張れといつも諭された編隊長の言葉を思ひ出し、最善の努力によつてまた微かにエンジンが動き始めた。しかし、正調ではない。不時着の決意を固め機首を返して飛翔〇分、殆ど山のみと思はれる小島を発見、山腹の傾斜面を横から胴体着陸をやつた。その衝動で額に傷を受け海岸まで辿りついて失神した。気がつくと民家に収容され医者がいないので、六十八歳になるといふ産婆さんが附きつきりで傷の手当をし、彼等の唯一の財産と思はれる牛を殺して歓待してくれた。〉と語っている。

令妹とし子さんは、兄君がお世話になったその島に渡って島民にお礼を申したいと、調査したが、当時島の名を知る術はなかった。しかし、終戦五十年目、多くの戦友・関係者の方々が懸命に調査、遂に屋久島東方の口永良部島と判明。とし子さんは早速靖國神社に報告の参拝をし、その島へお礼に渡りたいと涙ながらに語られた。

【散華の心と鎮魂の誠より転載】